八戸小

考えを深める子の育成

（３年計画の２年次）

校長　　小　林　　淳

１　研究主題について

⑴ 教育目標具現化の立場から

本校の教育目標である「誇りをもち、主体的に生きる子」の育成に迫るために、努力目標の一つとして、「対話しながら学ぶ子」を掲げている。さらに、学校課題をふまえ、今年度の学校目標は「みんなとなかよく前向きに解決していく子」と設定した。学習問題の設定の仕方を工夫し、話合いの場を効果的に設定することによって、学ぶ意欲や思考力の向上を目指したい。

⑵ これまでの実践から

児童の主体的に学ぼうとする意欲の向上や話合いを通して思考力を高めるという課題をふまえ、昨年度から「考えを深める子の育成」という主題で研究に取り組んできた。学習問題を設定する際に、子どもたちのつぶやきやつまずき、疑問などを取り上げて必要感をもたせたり、考える内容を明確にして提示したりしたことで、問題解決への意欲が高まった。また、「話す聞くスキル」を掲示したり、モジュールの時間に対話の仕方の指導に取り組んだりしたことで、進んで対話活動に取り組む児童が増えてきた。しかし、話合い活動の中で、相手と自分の意見をつなぐ言葉を活用していても、十分に考えを深めているとはいえない児童も多くいた。

そこで今年度は、昨年度に引き続き、児童が主体的に学び思考力を高めることができるように、学習問題の設定の工夫や相手の話を受けて話す指導の工夫を取り入れた授業展開を行っていく。その中で、さらに話合い活動における教師のはたらきかけなどの指導を工夫し、「考えを深める子の育成」を目指したいと考えた。

２　研究のねらい

考えを深める子を育成するために、解決する必要感のある学習課題を設定し、相手の意見を受けてつなぐ話合いをさせることが効果的であることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

⑴ 解決する必要感のある学習問題を設定することで、考えを深める意欲が高まるのではないか。

⑵ つなげて話す場の工夫をすることで、考えを深めることができるのではないか。

⑶ 教師のはたらきかけの工夫をすることで、話合いのときにより考えを深めることができるのではないか。

４　研究内容

⑴ 学習問題の設定の工夫

ア　解決する必要感のある学習問題の工夫

イ　学習問題の提示の工夫

⑵ 話合いの指導や支援の工夫

ア　根拠をはっきりさせて話合いをさせる。

イ　既習事項や経験を生かして話合いをさせる。

ウ　図や資料を用いて話合いをさせる。

エ　話をつなぐ言葉を用いて話合いをさせる。

オ　教師のはたらきかけを工夫する。（板書、揺さぶり、発問、指示、切り返し等）

⑶ 考えをもち表現する力をつけさせるための土台づくり

ア　何でも話せる雰囲気を作る。（場の設定の工夫、話す聞くスキルの掲示）

イ　学習の約束の定着を図る。（学習準備・ノートの書き方・振り返りの工夫）

（学習の準備→八戸小「学習のやくそく」の活用・ノートの書き方）

⑷ 研究の検証

ア　授業の中で児童が行う振り返りから、考えが深まったか変容を見取り、研究の日常化を図る。

イ　児童に対して年２回のアンケートをとり、話合いに対する意欲や実態を把握しながら研究を進める。

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・助言者	授業の概要（校内研究との関わり）
６	２８	第１回授業研究（２学年） 「スイミー」（国語） 授業者　教諭　宍戸　文子	導入で挿絵を並び替える活動に取り組ませて場面ごとの内容に対する問題意識をもたせることで、児童の学習意欲が高まった。また、つなぐ言葉を意識させ、小グループで場面ごとに題をつけさせることにより、児童の考えを深めることにつながった。
１０	２０	第２回授業研究（５学年） 「長崎漁港から食卓へ」（社会） 授業者　教諭　広田　陽介	二通りの魚の流通経路を比較させて、その違いから問題意識をもたせたことで、児童の学習意欲が高まった。また、グループ活動では、根拠を明確にして話し合わせたことにより、自分の考えをより深めることができた。

⑵　一般研修

月	日	内容・講師等
４	２８	ノート指導に関する研修
５	１９	１人１台端末の活用と遠隔操作について （講師：総合教育センター　石井　一二三主任指導主事）
６	２１	１人１台端末の活用と遠隔操作について （講師：総合教育センター　石井　一二三主任指導主事）
８	１９	ＡＥＤ講習会（講師：八戸消防署　署員２名）
９	１	１人１台端末の活用に関する研修
１	１２	理科プログラミング教材に関わる研修

６　研究の成果

⑴　児童の思考にずれが生まれるように、意図的に学習問題を設定することにより、問題解決への意欲が高まった。

⑵　「話す聞くスキル」を掲示し、授業の話合い活動で意識させ、児童は話合いをつなげようと努めていた。その結果、児童同士が自分の考えをより明確に伝えることができ、考えが深まる場面が見られた。

⑶　根拠を明確にしたり、つなぐ言葉を用いたりして話させることにより、自分の考えの変容をより明確に理解することができた。授業の終末で書く振り返りに自分の考えの変容やその根拠を書くことができる児童が増えた。

７　研究の課題

⑴　教科によって、学習問題の設定の仕方、話合いの目的、話合いの方法が違うときがあり、問題解決的な学習を進めることが難しい場合があった。児童が問題意識をもつような効果的な学習問題を様々な教科で考えていく必要がある。

⑵　つなぐ言葉を使って話し合うことができるようになってきているが、意識的・意図的に活用している児童は少ない。また、主体的に対話に取り組もうとする児童を育てていくためには、対話に主体的に取り組ませる学習のあり方を考えていく必要がある。

⑶　考えの深まりをしっかり見取ることができるような振り返りの書かせ方や評価の仕方について、より研修を進めていきたい。

（記入者　畑中　衛）